

ビルマの戦線 末期の壮部隊

香川県 宇賀 広太郎

私は大正八年生まれで、昭和十四年甲種合格で十五年二月十日に丸亀の歩兵百二十一連隊留守隊に入営しました。内地では一般中隊所屬だったが連隊本部勤務で、約三か年間、十七年十一月三十日に満期除隊になりました。再召集は、十九年六月十六日で丸亀の部隊へ入隊したのです。丸亀からはビルマの楯部隊要員を転属させることになっていた。当時ビルマの戦闘は危なくなっていた時でした。

私は本部に勤務していましたが、現役の時、内地で三年もやっただのでビルマ行を志願したのです。「お前行くのを止めろ」と言われたが、今度こそ戦地へ行つて死ぬつもりだったので「死んでもかまわぬ、僕は行くわい」「お前、阿呆か」と小突かれた。そんなことで一度残されたが、行く者と交替してまた志願した。「もう一度頭

を冷やしてこい」と中隊へ帰されたが、内地で三年も勤務したのだからと、軍装検査を受け、また「死に行くのか」と言われたが、死んで泣く者もないという気持でいたし、内地の軍隊もあきたし、また、日本がこのままでは敗ける等の気持ちがあったからでしょう。しかし、今考えてみると阿呆なことだが。

そのころは、制海権も制空権も連合軍が握っていたので、ビルマまで行くのは大変だった、無事に目的地に着けるかどうか第一問題でした。門司を出港して、台湾とルソン島の間のパシー海峡で潜水艦の魚雷攻撃を受け、船首の部分三分の一がふっ飛んだ、獅子の口みたいに吹き飛ばされ大部死んだ。もう一隻の船は傾いただけ、他の船団はみなシンガポールへ行ったようです。私はその時の戦闘詳報を書いたが今は忘れてしまいましたよ。海防艦や駆逐艦に助けられて、マニラへ緊急入港、上陸して一か月ぐらい埠頭の使役をやらされた。後の船団の負傷者や死骸の収容など、いろいろ雑役をやらされたが、相当悲惨だったです。

次の船は一九〇〇屯ぐらいの小さな船で、南支那海を

木の葉のように波に翻弄され、半死半生の状態で仏印のサイゴンに上陸したのです。

橋部隊は壮部隊（第五十五師団）に名称が変わっていたが、サイゴンで訓練を受けた。既教育者だけで、昭和十三年・十四年徴集者がほとんどだったが、通信部隊も一緒にいた。

サイゴンからメコン河を渡って、カンボジアのプノンペンへ寄港、タイのバンコックの宿舎に入り、タイメン鉄道、戦場に架ける橋（木橋だった）を渡ったときは、下を見ると谷底に貨車等が落ちていた。出発する前に、脱線演習というのをやった。脱線したら、車輪などをカンカンと叩いて脱線を知らせる、綱をつけて引っ張るといったものであった。

ビルマ国境を越えると同時に敵機の来襲です。はじめは日本の護衛飛行機だと思っただが、我々の貨車の（有蓋も無蓋も）中は物資で、人はその上、屋根の上だから危ないもんだ、そこを銃撃されるのだからたまらない。汽車は木炭車だから火を吹いて走るから目標になる。だが夜しか走れない、昼は待避しているわけです。

ラングーンに到着して各中隊に配属になったが、先輩たちはイ・ロ・ハ号作戦に参加したけれど、私達はその後で、うちの部隊はアラカン山脈を越え、ベンガル湾近くで戦闘中（ハ号作戦まで）で、私たちが追及したのはイエジーという部落で、その時は雨季で戦闘状態ではなく、駐屯中で寺院の兵舎に入っていました。

その時はもう昭和二十年になって、正月は寺で、揮一つでしたから正月気分が出ないが、恩賜の煙草と、菊の御紋の紅白の打ち菓子支給された。部隊に籍のある者には全部渡すというので、分遣勤務者とか、入院者にも持っていくことになった。私は、人事係の助手をしていたので、「お前運んで来い」というので出かけた。

木部のレパサンへ帰ってきたら、「お前の中隊は戦闘状態になる。部隊が来るから待っている」というので兵站宿舎で待機していた。

二、三日で部隊がきた、それから列車やで前線に追及した。油田地帯に出て印度寄りの奥地に入る。ポーパ山という大きな山がある。そこは水がふんだんにあったが、そこから先は砂漠みたいな所。せんせん水がないから給

水班が牛でドラム缶で運んで、そこで戦闘をした。

相手は、英、印軍だが、印度国民軍も、ビルマ防衛軍に寝返りを打たれ、四方八方敵だらけで、一人や二人では行動が出来なくなった。また、民兵が悪かった、民兵は沢山いて、どんな小さな部落でも犬が吠える。日本軍が来るというので発砲してくる。部落にはうっかり入って行けないわけです。

そんな時、私は敵中でただ一人取り残された経験があり、九死に一生を得たものです。英軍はほとんど日本軍の中まで進撃してきて、幹線道路をジープなどで往復しています、英軍に見つかればバンバン撃たれる。

昼間は行動できないので夜間ばかりだ。ある日、幹線道路を突破して馬糧の徴発をやったが、部落のそばに家があって、疲れて仮眠していた。連絡に行った伝令がいるのでその晩は出発しないと錯覚してしまった。というのは伝令の水筒代用の瓢箪の感触がある。安心してまた眠ってしまった。気が着いたら寝過ごしてだれもない。

昼は戦闘、夜は行軍、敵に包囲されているから、装具は防音装置をし、隠密行動だから大きな声を出せない。

軍装のまま寝てしまったので、早く部隊を探して追及しなければならぬ。周囲は敵と、敵性住民ばかり。自分には分隊長であるのに不覚だったと思っても後の祭です。

部隊は何処へ行ったのかわからないが、東南方へ行くということはわかっていた。西へ寄った方へ行ったら日が出てきて東がわかった。ビルマの婦人が頭に水瓶を載せてきた。日・ビルマ・英語ゴチャゴチャで話したのだが、「日本の兵隊は通らなかつたか」と聞いたら反対の方向を教えた。これは民情が悪いところだと思った。そうしたら避難部落で住民から包囲された。隙あれば殺してやろうという様子なので「近寄るな、手榴弾をぶつつけるぞ」と身構えて叫んだ。さらに「日本の兵隊を見なかつたか」といったら「通った、ニクぐらいの所だ」そこで「道案内をすれば金をやろう。嘘を言ったら手榴弾で皆殺しだぞ」と言ったら、まさしくそこには軍靴や地下足袋の跡があり、ようやく部隊に追及できたのです。敗戦のときは苦勞どころではない、本当に。山のなかで終戦を迎えたが、五里ぐらいのところは窺倉がある。それを持ってきて鉄帽のなかへ入れて玄米にした。それ

が仕事でしたよ。そうしたら英国軍の軍使だといってタローという少佐が中隊にやってきた。こちらは謀略だと思つて、衛兵所へひっ括り、外套も長靴も、身ぐるみ剥いでしまつて、放り込んでおいた。ところが飛行機から宣伝ビラを盛んに撒く「軍使を出したが帰らぬもので早く帰せ」というものなのです。

部隊の方もこれはおかしいというので、軍司令部へ護送せい、ということになった。軍司令部も宣伝ビラを見たものだから、部隊の方へ来る。こちらは軍使を連れていったので渡河点で会つた。これはいけない、というので今度は少佐を軍使として遇することになつて部隊へ戻つた。

しかし、こちらは食糧がないので、軍使の食物、銃をもつて豚や雞を追いかけて捕らえる。ところが英人はぜんぜん米を食べない。パンはないから毎日水ばかり、二十日間ぐらいいいたかな。少佐は「日本軍に捕まつたから恐ろしい。私のいたところまで連れていってくれ」というのです。

というので、小隊長以下一〇人編成で、私は下士官だつ

たのでタロー少佐を連れて、もといたところまで行くことになつた。日本軍の最前線から十里も奥まで入り、部落はこの対岸だといつたので、裸になつて泳いで部落へ着いたら、終戦だといつたので英軍は撤退してしまつていたわけです。

そこで、少佐を部落民に渡して帰つたのですが、前線の渡河点で工兵隊から、早く帰つて来ないと橋を爆破するから泳いで来いと言われていた。そこで一時間に一〇キぐらいの急行軍で歩いて帰つたわけです。

ビルマでは終戦後約一か年抑留され、丸一年間労役に服したのです。強制労働はシベリヤばかりでない。南方でも伝染病や栄養失調に悩まされて重労働を強いられたことはあまり問題にされてなく、不満でございます。

昭和二十一年七月、宇品港に入港したが、私は人事係の助手だったので、残務整理で残された。部隊の人たちはみな帰宅したのにと、その一日一日がうらめしくも思われました。